シンポジウム

教育現場との往還の学びに期待すること
―「教育実地研究」における参画型授業の可能性―

教育学研究科生活システム系教育
堀　内　かおる

1　はじめに

2010 年 10 月 30 日に開催された「第 4 回教育デザインフォーラム」において、筆者はコメンテーターとして登壇する機会を得た。その際に、「学生参画型の大学授業との連携」の提案をした。本稿では、その後の「学生参画型」授業の経緯を紹介し、今後に向けた課題を提起する。

2　リニューアルした「教育実地研究」

平成 22 年度の 1 年生から適用の新カリキュラムによる「教育実地研究」は、正式な専門領域決定前の 1 年生対象科目である。本授業の目的は、「学校における教師と子ども、その学び、生活、活動、それらを成り立たせているしくみなどの全体像を大まかにつかむ」ということである（同科目シラバス：到達目標より）。

「大まかにつかむ」ための手立ては、さまざまにあるだろう。学生たちは 1 年生で、大学生になってまだ半年余りで、教育という「営み」について考える入口に立っている段階にある。まして、学生たちは「授業を観る」ということがどういうことなのか、まだよくわかっていない状態だと言えるだろう。このことはまた、先入観や批判的な視点をもたない新鮮な目で、学校現場をとらえる感受性を持っているとも考えられる。1 年生だからこそ持ち合わせている教育や教師に対するあこがれ・理想を大切にしつつも、教育現場が直面する現実の厳しさとも出会わせたいと考えた。

3　学生の「参画」スタイル

筆者は、「教育実地研究」の新たな試みとして、この授業時間においては、1 年生の学生を「大人」＝「社会人（教員）」として扱おうと決めた。そのように学生を位置づけ、本人たちにも折に触れて伝えることで、学生たちに緊張感をもたらし、意識の変化が見られるのではないかと期待したのである。

筆者には、これまで担当してきた 2 年生対象の教育実地研究で、学生たちを受動的な立場において責任ある判断や行動を委ねてこなかったために、学生たちは自分のこととして課題を消化しきれず、「できない」ままになってきたのではないかという反省があった。

そこで、今回は社会人のルール（手続き）として教えなければならないことは教え、あとは自分たちで考え、計画し、省察する場を与えることにした。教員（筆者）は、附属校との間の授業のコーディネートを中心に、学生の学びや気づきを支援するというスタンスで臨むことにした。

4　附属横浜小学校での参観からの学び

横浜小学校での参観は、本授業の参観としては、一番初めに行われた。当日は、校内研究授業の参観に加えて、2 年生の生活総合科の授業で、児童たちが育てている蕎麦についての説明を聞き、インタビューを受けるなど、学生の存在を授業展開に組み込んでいただいた。学生たちにとっては、子どもたちと触れ合う有意義な時間を持つことができた。

参観の翌週には、大学で学生たちの振り返りの授業を行った。提出されたレポートから、学生たちの気づきを次に抜粋する。

＊学級での教師のアドバイスは自分が小学生だった時まったく意識はなかったが、話す順番を守る、話している人の話を聞くなどといった、どれも大きくなっていくうえで必要なことなので、それを何気ないいつもの発言の場で教えているのだと気づいた。

図 1　横浜小学校での体験
－ 2 年生の児童から蕎麦栽培について聞く－

＊授業に際して私たちに配られた学習指導案にも驚いた。そこには、学習内容だけではなく、予想される子どもの反応と教師の支援ということまでもが描かれていた。（中略）教材研究をして授業に臨むということは分かっていたが、一つの授業がここまで綿密に計画されて行われているということは初めて知った。改めて教師という職業は、奥が深いと思った。

慣れないスーツ着用で緊張の面持ちだった学生たちであるが、児童とのふれあいを通して柔らかな表情を見せていた。また、研究授業からは、授業という営みが教師の思いと願いに基づき緻密に構成されたものであることに目を開かされたようであった。

5　附属鎌倉小学校における学生参画企画からの学び

鎌倉小学校では、第１学年から第５学年までの各学年１クラスの学級の中に、１校時から３校時まで４人１グループとなった学生たちを配属し、学生たちは授業に参加するとともに、事前に自分たちで企画していた45分間の学級活動を実践した。

学生参画企画の実施に至るまでには、計画段階から約１カ月を要した。学生たちは、まず各学年の児童の実態についてビデオ映像を視聴し学習指導要領・教科書の内容などを調べ、イメージを膨らませた。そのうえで、各グループは企画書（案）を作成し、あらかじめ筆者が内容をチェックのうえ返却し、次週に修正のための話し合いをする時間を持った。修正された企画書（案）は主幹教諭及び配属予定の学級担任教諭が目を通し、さらに問題点を指摘していただいた。それをうけて、学生には企画の再度の練り直しを伝えた。確定版としてワープロ使用で清書のうえ、再び提出された企画書は、筆者が取りまとめて事前に小学校に送付し、最終確認を求めた。同時に学生には、各グル―プの代表者が学級担任教諭へ電話を入れ、挨拶と実施にあたっての打ち合わせを行うよう指示した。

こうして迎えた当日、鎌倉駅前朝８時の集合時間に、遅刻した学生は一人もいなかった。皆、緊張と期待感のみなぎる良い表情をしていた。各教室では、子どもたちの前で、精いっぱい活動を盛り立てて、つないでいこうとする学生たちの姿が見られた。

学生たちは、子どもたちのリアルな姿に触れた驚きとともに、事前計画や時間配分の大切さ、クラス全体をまとめ児童を集中させることの難しさを実感したようである。後日提出されたレポートには、「すべてが新鮮な体験」「こんな貴重な経験をさせてもらえて本当に良かった」「このような経験を繰り返しながら、少しずつ成長していけたらと思う」というような言葉が、散見された。

図２　学生企画実施風景－鎌倉小：１年生
－ホールで歌とゲーム－

図３　学生企画実施風景－鎌倉小：５年生
－教室でクイズ大会－

6　おわりに

教育現場の理解のもとで学生たちが教育活動に「参画」することによって、学生たちは実に多くのことを学んでいた。何よりも、教師という職業が現実味を帯びて見え始めたと言えるのではないだろうか。

筆者の報告は、教育現場との往還による本授業の、一つのパターンを示したにすぎない。それでもおそらく共通して言えることは、学生の「参画」を図っていく支援の在り方・学校現場との連携の重要さである。学生の主体性にまかせつつ、児童・学生双方にとって有意義な学びの場を保証するための、大学教員と附属校をはじめとする現場との協力・連携体制が改めて問われるだろう。「学生参画型」授業の多様な可能性について、もっと議論を重ねる必要があると考えている。次年度の授業に向けて、引き続く課題としたい。